

フーバー・タテイシ ラジオ プログラム

トットリ・ミツミョウ(MT) さんのインタビュー

1964年

インタビュー者 (Int): 名前は不明

私の人生読本 (人生の回想録)

このインタビューは、タテイシ氏 (1929-1979) が1950～70年代にホノルルのKOHO、KIKI、そしてKZOOというラジオ番組で放送していた“フーバー・タテイシ オーディオコレクション”の一つである。

註: 角括弧 [ ] 内は表記者による注釈。不明瞭な言葉は ((?)) で表記される。太字の英語(例: **family**)は会話が英語でされたことを示す。

MT: 低いかな? 声が...

Int: おはようございます。只今から、トットリ先生をお迎えして、人生読本を語らせて貰います。ご承知のとおり、トットリ先生は、いまLilihaの第五仏教院におられるお方です。トットリ先生、ご苦労さんでございました。早速です。先生にお伺いしたい。もう長いこと先生のお顔をいつも見てるんですが、いったいいつごろハワイに来られたんですか。

MT: えっと、大正14年だから、ま、ちょっと40年なりますね。

Int: 大正14年でいいますと、震災後...1900...

MT: 25年かね。

Int: 5年ですか。そすとあの移民法が通ってからの時代ですね。

MT: そうですね。

Int: ああそうですか。それで、初めは、どこへおられたんですか。

MT: はじめは別院に駐在で1年半。それからマウイに約10年ね。

Int: おお、マウイ時代があったんですか。

MT: Wailukuの光明寺っていうのにな、10年。それから、日本へ4年半ほど引き上げて帰ってました。それから **ninety-fourty...**1940年かな、戦争前ですな。再渡航しまして。

Int: **そして**Haleiwaへ行かれた?

MT: ええ、そうそう。それからHaleiwaへ。Haleiwaに6ヵ年。それから別院を定年になりましてね。

- Int: おお、左様でございますか。
- MT: 別院で12ヵ年いまして、そしてまあ今日まで。
- Int: 今頃にご隠居半分ですか。
- MT: はい、静かに暮らしております。
- Int: かえって活動が激しいようですね。
- MT: いやいや、ごくごく静かに暮らしております。
- Int: 先生は、学生時代は高野山にいましたか？
- MT: 最初は、高野山には3年ほど行きましたね。それから京都の方に変わりましたが。
- Int: 当時の学校は？
- MT: 真言宗京都大学とっていましたね。
- Int: 真言宗京都大学…つまりあの、弘法大師がはじめられた綜芸種智院…ていうんですか？
- MT: そうです。綜芸種智院のあったところです。
- Int: 後身になるわけですね。と、こっち来られる前に、日本で学校が済んでからのち、だいぶ時間があったわけですか。
- MT: 2ヵ年ほどですね。広島県で住職をしてですね。それから布教講習所などに入って、布教の研究をしておりました。
- Int: 付かぬことを尋ねるんですが、あの、山での修行時代の思い出話とかなんか、そういう様なのでひとつ…
- MT: だいぶ前のことですね、今どきのその学生などとはだいぶ変わっております。非常にまあ、旧式の学生で生活方法で。ことに寺に置いてもらって、いわゆるドウジキ [直道ジキドウ] といふか、それをしもって学校に通うんですが。それは、主として学資の少ない者か、あるいは、特に高野山の修行に念を入れたいという人の希望でそういうところに厄介になってですな。食費を払わずに苦学するわけですよね。で、まあ私が行ったころは大正5年…4年でして、今年がちょうど高野山の開祖1150年ですが。ちょうど私が入ったころは1100年の大法要の直後でありまして。ちょうど50年前になりますが。その時に苦しかって、まあ今、かえって有り難いと思っておりますのは、高野山…その宿坊の寺院内の学生生活の食事ですな。そりゃあもう今から考えてもぞっとするようなもんで。
- Int: 豆腐ばかり食べとったていうんですか？
- MT: えー、豆腐だけならまだええんですがね。とにかく、こういう調子ですね、参詣人がたくさんありまして。各部屋に皆が泊まりますからね。とまあつまり、客に出したお櫃ちゅうものが10も20もあるわけです。そうするとお櫃に残る、幾分かご飯が残る、はちまきみたいだね、白いのが。そいつを全部、その納所ちゅう

のが、台所の坊主が集めてですな、そしてそいつに水足して、そしてその朝晩の学生の食事に充てるわけです。でまあ、もちろんお茶粥ですがね、和歌山県で。ところがそのお茶粥って言うのがそういう風な、ここらで炊いているような上等なんでないんで。残り、残飯を炊いたものだから甚だ不味いし。

Int: あはははは。

MT: ところがそれをそのまあ、ぐずぐずして遅う行きますとですな、先のものが実ばっかりさらえて後は水ばかり残ってわけで。よくその茶粥っていうより“マメ粥”だところ言っって。“マメ粥”ってなんだって。目の玉が二つ映っとる[おそろく綴るなら真目粥]って。

Int: あははは。なるほど。

MT: それでその、朝晩のおかずはゲントク味噌っちゅうのがありましてね。

Int: ゲン…？

MT: ゲントク味噌。糠でこしらえた味噌ですな。

Int: それは山でこしらえる？

MT: ええ。こしらえるんですな。それでその御供を長う持たすために塩辛いよう出来とるんですよ。まあそいつを方口に入れて、大きな鍋のへりにおいてですな。でまあ、食事の作法だけは嚴重じゃから、冬の凍るようなときでも板間へ莫塵一枚敷いてね。そしてまあ食事作法して、それをいただく。それが朝晩の食事。昼のおかずというのが今のこのポテトですな。あれを、皮むかずにあのまま醤油でなしに塩で炊いてね。それがま、昼のおかず。ほれからま、ええ時には、その、シカザイとって、参詣人に食べさすときに牛蒡やら大根やら綺麗に皮を剥いてある。その皮を捨てずですな。そいつを綺麗に洗うてこんまに刻んで、そしてそのまま油でも入れて炒めてですな。おかずをこしらえるんですよな。それをシカザイというてま名高いんですよ。

Int: どんな字書くんですか？シカザイって。

MT: シカザイって、鹿に食べさせる材料です。

Int: おっ！

MT: へへへ。鹿材ですな。

Int: 食料は全部山にもって上がるのですか。

MT: そうそう、それがためにね、非常に不自由ですから、まあ儉約したわけだろうと。それからまあ、第一のその何は、食事を粗末にしないと、いうことを教えることが主眼ですけれど。しかしまあ、悪く言うと、その精神がだいたい薄らいでいって、むしろ儉約の方が主になってくる。それはなぜかという、そこの住職はですな、まあええんだけど、納所っちゅうのがおって、つまり台所を一年なんぼってというようなのが請け負うようなわけで。したがって儉約するわけなんです。で、あてられるのは学生が一番酷[こく、酷い]あって。今から考えると、ぞーとする

ようですがね。栄養失調になる者でけたよね、しましたね。私もその一人で苦しみましたけど。でまあ一年半ほど居って、その後、とうとう京都に変わりましたですよ。

Int: あーなるほど。私は8月と10月始めと二へん行っていますが、この冬…寒いところだそうですね。

MT: 冬もうそらとても寒いですな。部屋の、まあ寺の中ですな、風呂へ入って自分の部屋に帰るときは、手ぬぐいはもう棒みたいになっておりました。かなり寒いですね。

Int: その頃になるともう、山に登ってくる人もほとんどいないんでしょうね。

MT: いやいや、それはその時をあててですな、農家の暇のときに。たとえば、北国とかね、ああ言うところの人は、伊勢参宮を兼ねて、そして高野で年とる[年を越すということ] というようなことをしますね。でかなり、参拝者もあるんです。団体が。

Int: そうですか。まあ今は交通機関が便利だから、なんですけども。昔はあの、高野口から上がったのだと思いますが。

MT: そうそう。高野口からね、歩いて。昔の50丁1里で三里ちゅうですかね。ああいう風に歩いたものですよ。

Int: …と、雪はどんなですか？

MT: 雪は、まあ今頃わりあい少ないらしいですよ。まず11月末が、はようと、12月から降りだして3月の終いぐらいまでは雪の上を踏んどるようすな。

Int: へえ、ずーっと？

MT: はい。で4月ではまだ谷間に雪が…谷間に雪があるんですよ。で、まあ今頃は、そうした食事もだんだん変わって、非常にまあ良くなっておるようすありますけどね。

Int: でも依然として、その精進料理を作っている？

MT: ええそうそう。精進料理ですね。そして、これは…ずいぶんそれは辛かったわけですが。今から考えますとですな、その間に、まあ修行させて戴いたおかげで、何を食べても、その、その時のことを思い出すと食事に対する不平というものがなくなってね。何食べてもありがたい感じしますね。ま、それがまあ一番…取りどころ [いいところ] ではあったと思いますね。

Int: ところで先生も大分、こうまあ…その隠居さんらしなってきましたですが、近頃の心境…と言いますか。どうも隠居ではなさそうにある…隠居さんでもあるんですが。

MT: まあ今んところ、半隠居みたいなもんですな。ごく至って静かに暮らさしていただいて。たいへん喜んでおるんですが。でも、私としては朝早く起きて勤行をして。そして本堂の掃除、花立て、ご飯の上げ下げ。もう一切を自分の手でやると、

いうことにしてですな。それをまあ、非常に嬉しく感謝して。心持ちは小僧の昔に還ったつもりで、直接まあ仏さんに給仕さしていただく。そのよろこ…嬉しさをたいへんに喜んでいるようなわけで。でまあ、負け惜しみを言うようではありませんが、そうじゃなしに、本当の意味からですな。まあ大きな寺に座り込んどると役僧らいろんな人を雇って何もかも仏さんの給仕も人任せになります。まあ丈夫で、こうして一切を自分の手で、お鉢の上げ下げから花の水換え、本堂のモップまで自分でやって。心からこの、お給仕をさしていただくと。小僧時分には嫌々しおりましたが。今ではまあ心から喜んでお給仕をさしていただく。これを非常に私は喜んで幸せなもんだと思って、まあ喜んで暮さしていただいております。

Int: いやどうも。それから先生あの、再々日本へ皆さんと一緒にいけますが。日本へ引き上げて、向こうで余生を送るといふ、あの考え方についてはどうですか。

MT: えーあれもですな、近頃いろいろまあ、**social security** [社会保障]のお金を当て[目当て]で帰る人もこう、だんだんあるようであります。私もまあ以前に、先に言いましたように引き上げて4年半ほど帰った経験もあります。その経験なり今日の事情から考えましてもね。年が寄ったら[年老いたら]まあ何ちゅうても…子に従えで[親は子に従え]。尚…血は水よりも濃して。ハワイでもいろいろな親子の関係もありましようけれども。できるならば、親子、年寄ったら子供の縁[へり]で、ハワイで暮らしたほうが一番ええと思うんですな。それはその、私ども一時引き上げて[日本に]帰りましたが、まあ若い時でありましたがね。日本の良いところばかりを考えておくと、また、帰るとなるとまあ多少の金も持っておるといふのが事実で。で、そうしますと、婿いんでもかなりやっていると、こうまあ、算用して誰で帰るらしいです。実は帰ってみるとですな、なかなかそうはいかんで。それはまあ無理ないこと。思うてみると、日本におる人は貧乏をしておってもですな、もう親代々から田舎のことで話しましても、たとえば、組合で講会[おそらく田の溝の掃除か会合])があるとか、あるいは、公共の墓掃除があるとか。何とかいう場合にも皆が残らずその付き合うてきておると。ところがハワイで何10年もおって少々の小金を貯めて帰って来たところで、それが培こうてないわけだからね。そうするとまあ、学校の寄付とか、あるいはお寺の寄付であるとか。あるいはお宮さんの寄付であるとかいうような場合にですね。もう人並み以上に何倍もその[寄付が]できる間それでよろしいと。皆が重宝にやってくれますけれどもね。けども臨時に帰ったときにはそれが出来るけれども、いよいよ引き上げて帰って日本で永住するということになると、そういつもそんな事できないから。で、そうしますと、思うたほど人が…まあ持ち上げてくれんわけなんですね。で、そうするとこれは当てが外れた！というような事となりましてな。非常に失望しやすい。だから、そこを考えてみるとですな。どうしてももうハワイに長うおった者はハワイがよろしいし。まあアメリカなり日本も方々を歩いてみましたけれども、気候からいって何もかも全て、ハワイが一番結構なことだと思ふし。それからまあ何と言うても、年が寄ったらまあ子供のですな、世話になるつもりでおられる方が一番幸せなことであると。で、まあ金ばかりで問題…

色々なことが解決出来るもんじゃないんだから。でいうように、今は子供の縁にいるのが結構であると思うんですな。それには、私はいつも思うのは、大勢の人の中で時々子供の前でわしゃ子供の厄介にならんと、言うんじゃないかっていうのをよく聞きますけども、あれは非常に良くないことで。まあある年頃からわしらは年寄ったらお前らの厄介にならんならんぞ[厄介になる必要がある]と、いう風にぼつぼつこの仕込んでいっておいた方が、私はええんじゃないかと。こう思うんですな。それは非常に大事なことだと思います。

Int: そして、何年か…何年かにいっぺん日本に遊びに行く。

MT: ええ、それはええですな。それは結構です。

Int: 今度はいつ行かれますか。

MT: それはまだ、分かりません。

Int: ああそうですか。去年…今年行ってきたんですか？

MT: ええ、今年行ってきました。

Int: ああそうですか。では、来年は休みになる？

MT: ええ来年は休みになる。それでまあそのね、先にちょっとお話ししたいと思ったんですが。この我々の生活の上ですな。一番私は、大事だと私は信じて、そう私もそう思って暮らしておるんですが。全ての幸せも不幸せも、人から良くせられるのも、また、妬まれるのもですな、全てこれは因縁だと…いう事をその仏教の因縁という道理をですな、十分に頭に入れて。そうしないというと、どうしてもこの世界では全てのことが矛盾が多て割り切れないと。で、仏教のいわゆる三世因果で。過去から現在、未来と。長い物差しで計って行って、ものを考えたなら、考え直したならば世の中の矛盾というものが解決ができると。それがま、仏教の因縁で、生活の上にこの考えが一番土台として大切なことだと思うんですな。それから、まあ一つ[もうひとつ]は、仏教でいろいろ悟りとか、お浄土参りとかと言いますけれども、結局まあ仏というものは自由…自由を得た人を仏[ほとけ]とこう言うんだから。執着を離れてですな、生活をしていくと。いうのはその、有るときには有るように、無いときには無いように。有れば有るように使うし、無ければ無いように締って行こうし。ごくその経済的な問題ばかりでなしに、学問にしても、知恵にしてもそうで。とにかくまあ、有れば有るように、無ければ無いように、飾り立てをせずに、そのままに、ごく自由な暮らしをしていくと。例えば、人が来ででも何と何と揃わな昼飯出してあげられんと、いうと非常に窮屈になるで。あるものでお茶漬けでも何でも構わん。気持ちよく出してあげるという気になれば、いつ人が訪ねてきても一向、頓着なしにご愛想が出来るし来た人も気持ちがいいと。それが、いわゆるまあ自由な境涯で。仏の境涯というのは、この束縛されん執着のない自由な生活が、心持ちがいわゆる仏の境涯で。これを自分で…せいぜい味おうて行くように努めると。言う事がことが非常に大事なことだと思います。はい。

Int: まことに、有難い話を承りました。ありがとうございました。

MT: いえいえどうも。